

# 土佐のわらべ

第433号 《第455回（2018. 9. 13）子どもの本の読書会記録》参加者8人・文書参加1人

## 『魔女の宅急便』 角野 栄子/作 福音館書店

角野栄子さんが、今年の3月に「国際アンデルセン賞」の作家賞を受賞されました。受賞からは半年経ってしまいましたが、この嬉しい出来事をお祝いしたいと思い、オーテピア初回の読書会では角野栄子さんの代表作『魔女の宅急便』を取り上げることにしました。

自分自身が『魔女の宅急便』を読むのは小学生時代ぶり。この頃はまだ途中までしか刊行されておらず、全ての続編を読むのは今回が初めてでした。

大人になって読むと、キキのお母さんのコキリさんや、新天地の町で良い相談役になってくれるおソノさんなど、キキの周りで見守ってくれる大人たちの気持ちがよくわかります。コキリさんがキキを送り出す時に、こっそり涙を流していたかも、なんて、子どもの頃は思いもしませんでした。早く出発したいキキの気持ちになっていたんですね。

そして驚いたのは、自分自身が今、おソノさんと同じくらいの年齢になっているかもしれない、ということ。初めて読んだ当時は、おソノさんのことを「おばさん」だと思っていたのですが……。

キキは13歳にして宅急便という仕事を始めますが、決して優等生タイプの女の子ではありません。真面目に頑張ろうと思える時もあれば、今日はさぼりたいと思う時もあるし、伝統を破っておしゃれしたい葛藤や、女子特有の繊細な思いを分かってもらえないことへのイライラ、年の近いかわいい女の子へ張り合いたくなる気持ち、など、子ども時代に（いや、大人になっても）経験したこのとある様々な感情を、キキはさらけ出してくれます。だから、いろんな場面でキキに共感できてしまうのです。

けれど、どんなことがあっても、最後には必ず自分を見つめなおすことができるキキ。現実世界で困難にぶち当たることがあっても、「キキも頑張っているんだから自分も頑張ろう」と素直に思わせてくれるような、楽しい物語でした。

次に、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

・初めて見たのがアニメのほうだったので、アニメ版の印象が強い。本を読んだのはかなり後。「魔女」というと、敵がいて戦ったりするイメージもあるが、この物語では、すごく生活に密着しているのが良い。男の子と女の子で、成長の早さが違うなということも感じる。魔女の血が薄くなる中で、寄り合うのではなく、散らばっていく、というのが面白いと思った。

・アニメは見たことがなかったので、面白く読めた。現代の日本でもなく、外国の話でもなく、違った世界で描かれている。現実と切り離された世界を堪能できた。

・キキの姿を見ていると、失敗しても、それを乗り越えていけるエネルギーを感じる。

・ジブリが苦手だったのだが、本当に面白かった。悪人が出てこない。周りの人にいろいろ思われても、知恵をつけて、考えて、育っていくのは、現実の世界に置き換えると進学のように。続編も続けて読んでみたい。

・林明子さんの挿絵が好き。

・買って手元に持っていた本。言葉のリズムもよくて、一気に楽しく読める。日本版赤毛のアンのような、成長物語だ。